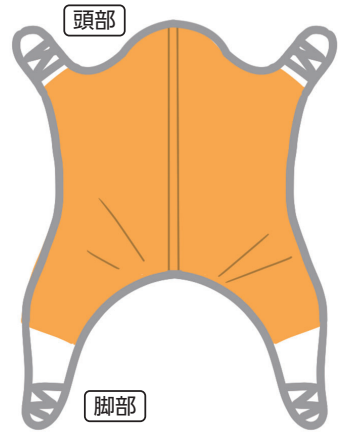


吊り具の選び方のポイント (在宅・重症心身障害児向け)

【脚分離・ハイバック】



脚分離 (きゃくぶんり) 型の吊り具は、車いすやバギーに乗った状態でも着脱がしやすいのでオススメです。また、首が座っていないか不安定だったりする場合は、頭部までサポートできるハイバック型の吊り具が安定してよいでしょう。脚部のストラップは股の部分でクロスすることで姿勢が安定します。

【分離型シャワーキャリー】



脚分離型のような布状の吊り具は、どうしても装着に手間がかかります。身体の変形が著しかったり、突発的に動いてしまったりして、落下の危険性がある場合は、分離型シャワーキャリーを使って入浴をする方が安全です。ただし、吊り具を装着する手間は発生しませんが、保管場所等の課題はあります。

吊り具の評価方法のポイント

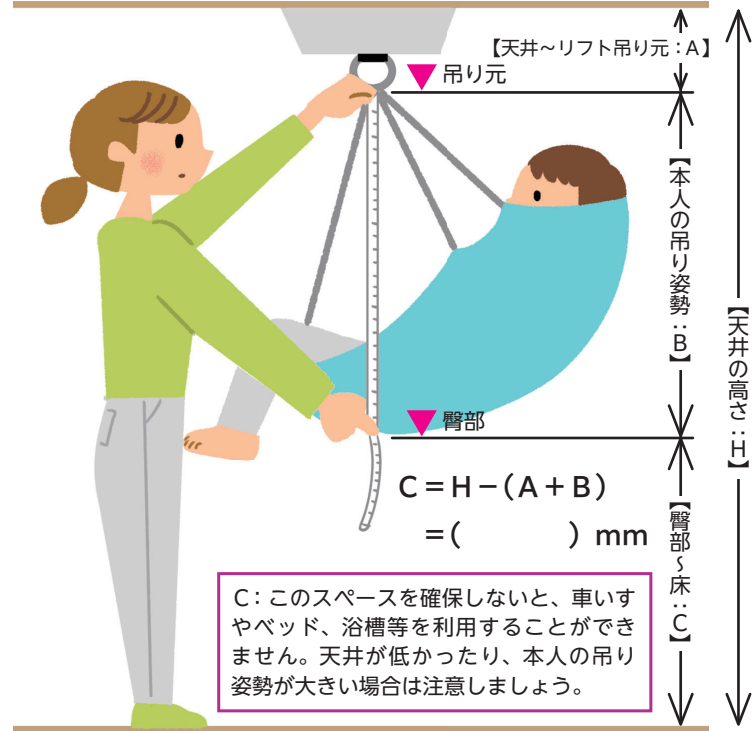
メーカーのウェブサイトやカタログだけで吊り具を選択するのは控えるようにしましょう。特にお子さんの身体に密着して使う吊り具は、理学療法士等の医療専門職に相談し、試しながら選択することを強くオススメします。またお子さんの場合は成長しますので、短い期間で吊り具が身体に合わなくなることもよくあります。定期的に吊り具を試すことはとても大切です。サイズが合わなくなってきたら、すぐに相談しましょう。

評価方法のポイント：

- ①現状の身体に合った吊り具を選択すること。
※将来を見込んで大きな吊り具を選ばないこと。
- ②吊った姿勢でベッドや浴槽、車いすなどを乗り越えられるか。
※環境との適合が非常に重要になります。

※下記、【吊り具・リフト検討用紙】を参考にしてください。

【吊り具・リフト検討用紙】



【リフト・メーカー】	【リフト・製品名】
()	()
【吊り具・メーカー】	【吊り具・型番】
()	()
【吊り具・仕様】	
シート・脚分離・その他 ()	
【天井の高さ：H】	() mm
【天井〜リフト吊り元*：A】	() mm
※リフトを一番上まで上げた時	
【本人の吊り姿勢：B】	() mm
【車いすの座面の高さ】	() mm
【ベッドの高さ】	() mm
【浴槽の縁の高さ】	() mm
【備考】	

子どものリフト・吊り具考え方と選び方



このパンフレットは、子ども向けのリフトや吊り具について、基本的な考え方や選び方を紹介しています。子どもたちの豊かな生活の実現に向けて、抱きかかえ介助が大変になる前から準備しましょう。

協力者：下元佳子 (一般社団法人ナチュラルハートフルネットワーク・理学療法士)
山崎哲司 (横浜市総合リハビリテーションセンター・理学療法士)
鈴木基恵 (横浜市総合リハビリテーションセンター・一級建築士)
中村詩子 (横浜市総合リハビリテーションセンター・リハエンジニア)

参考文献：
・改訂6版 福祉環境コーディネーター検定試験1級公式テキスト、東京商工会議所、2022
・OT・PTのための住環境整備論 第3版、三輪書店、2021

企画・作成：横浜市総合リハビリテーションセンター研究開発課 西村 顕 (一級建築士・工学博士)

このパンフレットで使用しているイラストの無断転載・無断複製はご遠慮ください。イラスト/うつみちはる 発行/一般財団法人 保健福祉広報協会 2023年9月

抱っこの方がサッとできて時短なのですが・・・

子どもがまだ小さい時は、親がサッと抱っこをして、椅子に座らせたり、一緒にお風呂に入ったりすることができると思います。しかし、子どもはどんどん大きく成長していきます。親よりも体格が大きくなることもあります。

いつまでも抱っこができる訳ではありません。子どもの成長スピード、親の身体への負担やストレスなど総合的に考えて、住宅改造や福祉用具の利用、人的サービスなどを組み合わせて、抱っこだけに頼らない生活を目指しましょう。



幼児期



学齢期



成人期

リフトを導入する目的は主に2つあります



親の介助負担を減らすため

床から子どもを抱っこして車いすに乗せたり、入浴介助の時に抱っこして浴槽をまたいだりする時は、例えサッと短時間でできたとしても、腰や肩等にかかる負担はとても大きいものです。一方、このような移動や移乗の際に、リフトを使うと介助負担は大変少なくなります。毎日の介助負担を少なくする考え方はとても大切です。



将来の子どもの自立に向けて

リフト利用において、誰にでも安全に子どもを介助できるように状況を整えておくことは、将来の地域生活に向けてとても重要な考え方です。それは、将来子どもが地域のグループホームなどで自立して生活する時に、多くの人から安全に介助を受けられるからです。リフトを複数の支援者が利用できる状況が整っていれば安心です。

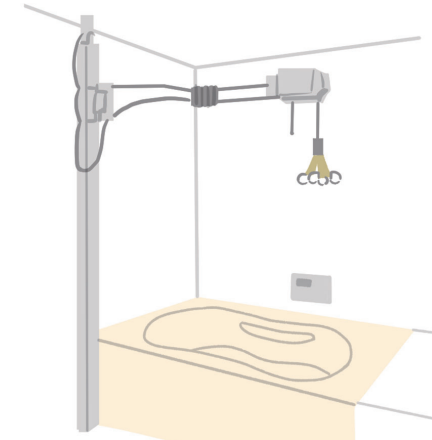
リフトの選び方のポイント（在宅・重症心身障害児向け）

【床走行式】



【長所】キャスターで移動できるので複数の部屋で使えます。日常生活用具の給付対象となっています。【注意点】使用時は意外とスペースが必要になり、畳などの床材を傷める場合があります。入浴時は利用できないものが多いです。

【設置式】



【長所】天井走行式リフトに比べて安価です。補強材を壁内に入れば支柱を無くすこともできます。【注意点】移乗の範囲（リフトの可動範囲）が天井走行式に比べて狭く、また支柱があると頭や足をぶつけやすいという面もあります。

【天井走行式】



【長所】リフトの可動範囲が広く介助がしやすいです。補強材を天井内に入れておけば支柱を無くすこともできます。【注意点】ご本人や車いすをリフトの真下に移動しないと吊り上げられません。照明器具やエアコンとの干渉に注意が必要です。

X-Y方式（天井走行式）



天井走行式リフトで部屋の中を自由自在（X方向、Y方向）に移動できるため、ベッドとポータブルトイレなど複数の場所に移動ができるので、大変便利です。車いすに移乗する位置の微調整もX-Y方式は使い勝手が良いでしょう。

かけかえ移動（天井走行式）



天井走行式リフトの「かけかえ」ができるタイプは、1台のリフトでリビングから廊下、廊下から脱衣室等、部屋間の移動ができます。天井のレールを追加すればさらに移動範囲を拡げることができ、何度も乗せたり降りたりする手間が減ります。

賃貸住宅でも設置可



リフトと言えば、新築時や大がかりな改造をしないと設置できないイメージを持っている方も多いと思います。しかし多くのリフトメーカーには賃貸住宅でも対応できるリフトがあります。すぐに購入せず、まずは自宅で試してから購入を検討しましょう。

耐用年数は約10年



リフトは購入後、概して20年以上使えるものではありません。洗濯機や冷蔵庫等の家電製品と同様（10年程度）の耐用年数*と考えましょう。その上でいつ頃導入するのが最も効果的なのか、家族や支援者と相談しながら検討しましょう。
*具体的な耐用年数は各メーカーにご確認ください。